

伝小野通女筆《徳川家康像》について

中村 玲 (筑波大学)

東京都港区・大養寺(浄土宗、知恩院末寺)には、美濃の武家に生まれた近世初期の女性画家・小野通女(1567~68—1631)筆と伝わる《徳川家康像》(以下、大養寺本)が所蔵される。本発表では、寺社奉行の命で編纂された『江戸・武蔵寺院由緒記』(元禄9年(1696))を初見とするが、従来の研究では詳述されていない大養寺本について論じたい。

寺伝が引用された『風俗画報臨時増刊 新撰東京名所図会』第32編(明治34年(1901))には、大養寺本は慶長18年(1613)、徳川家康(1542—1616)が72歳の折に、通女が家康を対看写真したものとして伝える。この記述に従えば、大養寺本は家康の寿像であり、現存する最も古い「徳川家康像」と見なされる。

大養寺本の像主の姿形は、狩野探幽(1602—1674)筆とされる、《東照宮御影 元日拝礼》(徳川記念財団蔵、江戸時代(17世紀)制作)をはじめとした一連の「東照大権現像」や「霊夢像」に酷似する。探幽は慶長17年に家康に謁見したが、当時11歳と幼く、その4年後に家康は没し、生前の像主を描く機会はなかったと考えられる。大養寺本は探幽らによる「徳川家康像」に見られる神殿などが描かれておらず、家康が神格化される以前の姿を直接に写したものと見受けられる。それゆえ、探幽が像主を描く以前である、慶長18年制作の先行作例であり、探幽らにより描かれた「徳川家康像」の典拠となつたのではないだろうか。これまで探幽筆の「徳川家康像」は、先行作例やその下絵、または家康の落胤という説があった酒井忠勝の風貌に基づき描かれたことなどが推察されてきたが、より近似する大養寺本を踏襲したものと判断されよう。

大養寺本には、家康と縁の深い僧である増上寺第12世・観智国師(1541~44—1620)による「和光同塵者 結縁之始也 八相成道者 利物之終利」という画賛と、「増上寺普光観智国師書之八十口【朱文壺型印「観智国師】】」という落款が墨書される。観智国師の墨蹟に見られる字形や印との照合により、筆蹟の専門的な示教を得て、大養寺本の画賛や落款は国師の直筆と同定できるものであった。画賛の意を付度するならば、衆生済度や家康の供養のために記され、家康が没し「東照大権現」となった元和2年(1616)以降、観智国師の没年である元和6年を下限として着賛されたと指摘できる。

大養寺は、慶長16年、江戸幕府2代将軍・秀忠(1579—1632)の乳母ないし側室・観崇院(?—1621)を開基とし、観智国師の高弟で、観崇院の養子・然蓮社儼誉朗月(1577頃—1630)を開山とする、徳川家に大いに関わりのある寺であった。《霊昭女之図》(今治市河野美術館蔵)など通女の他の作例との比較から、大養寺本は通女筆であるという伝承を認めてよいであろう。通女は、御用絵師・狩野派とは別の立場で登用され、家康の身近に仕えたために彼の寿像を描くことができ、幕府や狩野派に影響を与えた重要な女性画家であったと解釈したい。